

日本学術会議第22期の IAMAS 小委員会

中村 尚*・浮田 甚郎**

2005年10月に新制の日本学術会議（以下、学術会議）が発足（中島・中村 2007）して6年が経ち、2011年10月に学術会議が第22期を迎えるに当たり、会員・連携会員の大幅な入替があった。これに合わせて、学術会議の下部組織である地球惑星科学委員会や環境学委員会のメンバーも大きく替わり、前者の下にある IUGG（国際測地学・地球物理学連合）対応の分科会及びその傘下の7つの協会に対応する各小委員会の委員構成にも大幅な変更があり、かつ IUGG 傘下の IACS（国際雪氷圏科学協会）対応の小委員会が新設された。

このうち、日本気象学会（以下、気象学会）に関連する国際対応活動を主に担う「IAMAS（国際気象学・大気科学協会）小委員会」（中島・中村 2007）も委員の約半数が入れ替わった。新委員長（中村）と新幹事（浮田）の下、引き続き気象学・大気科学の各分野を広くカバーする委員構成とした（第1表）。IAMAS 小委員会は、(1)国際的には IAMAS との連携、国内的には気象学会との連携の下、気象学・大気科学の振興、普及、及び社会貢献に関する事項；(2) IAMAS に関連する諸委員会への委員等の推薦や国際会議等への代表の派遣、国際会議等の日本への招致に関する事項；(3)その他の気象学・大気科学に関わる諸問題を審議することを目的としている（中島・中村 2007）。

上記(1)・(3)については、第20・21期の IAMAS 小委員会において中島映至委員長（東京大学大気海洋研究所）の下、2009年に政府が行った所謂「事業仕分

け」にて予算削減方針が示された複数の科学技術・高等教育関連事業について予算復活を訴える意見書を政府に提出した他、学術会議で進められてきた大型研究計画の策定に寄与を続けてきた。また、気象学会の2011年度春季大会においては、「東日本大震災に伴う原発環境汚染に関する勉強会」を開催し、福島第一原

第1表 日本学術会議第22期 IAMAS 小委員会名簿 (50音順)。

*：委員長，**：幹事，†：学術会議第三部会員，
§：学術会議連携会員。

氏名	所属	関連国際委員会 ⁺
浮田甚郎**	新潟大学 自然科学系	ICPM
鬼頭昭雄§	気象研究所 気候研究部	ICCL
近藤 豊	東京大学 大学院理学系研究科	ICACGP
佐藤 薫§	東京大学 大学院理学系研究科	ICMA
塩谷雅人	京都大学 生存圏研究所	IOC
津田敏隆§	京都大学 生存圏研究所	SCOSTEP
中島映至†	東京大学 大気海洋研究所	IRC
中村 尚*§	東京大学 先端科学技術研究センター	ICDM

⁺各委員と最も関係の深い IAMAS 傘下の国際委員会（略記；但し、SCOSTEP を除く）。

ICACGP: International Commission on Atmospheric Chemistry and Global Pollution

ICCL: International Commission on Climate

ICDM: International Commission on Dynamic Meteorology

ICMA: International Commission on the Middle Atmosphere

ICPM: International Commission on Polar Meteorology

IOC: International Ozone Commission

IRC: International Radiation Commission

SCOSTEP: Scientific Committee on Solar-Terrestrial Physics

* Hisashi NAKAMURA, 東京大学先端科学技術研究センター／日本学術会議連携会員。

** Jinro UKITA, 新潟大学自然科学系。

© 2012 日本気象学会

子力発電所の事故による放射性物質の移流・拡散・沈着過程の実態把握や予測再現実験による検証，さらにはこうした深刻な事故発生時における科学者の役割などについて，約150名の参加者と議論した．こうした活動を通じ，学術会議からの提言「放射能対策の新たな一歩を踏み出すために一事実の科学的探索に基づく行動を」の取りまとめに寄与した(<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-22-t-shien4.pdf> (2012.5.21閲覧))．さらに，気象学会の地球環境問題委員会と協力して，地球温暖化に関する入門書の刊行を企画している．

第20・21期のIAMAS小委員会が特に力を注いできたのは若手研究者問題である．気象学会との緊密な連携の下に実施した全学会員向けのアンケート調査を通じ，若手研究者問題に関する実態把握やポストドク研究者や大学院生の意識調査を行った．この第1次集計結果は，既に「天気」に掲載されている(中村ほか2009)．そして，アンケート調査の集計結果を広く会員に紹介し，問題解決の糸口を探る集会を気象学会2009年度春季大会で開催したの続き，2010年度春季大会では民間企業数社の就職担当者と日本学術支援機構の担当者を招いた集会を開催し，企業側がどのような人材を欲しているか率直に紹介して頂いた．これを踏まえて，2011年度春季大会では，初の試みとしてポスター会場に「リクルートブース」を併設し，参加した5社の担当者と大会参加者がじっくり話し合える場を設けた．第22期においても，引き続き，気象学会と連携して，ポストドク研究員などの若手研究者のキャリア形成に関わる諸問題に取り組んでゆくつもりである．特に，リクルートブースは，各大会実行委員会と連携し，是非恒常化させていきたいと考えている(後注1)．それとともに，学術会議地球惑星科学委員会の下に新設された「大学教育問題分科会」(佐藤・中村が委員)とも連携しつつ，1人でも多くの大学学部生や高校生が気象学・気候学・大気科学の研究者を目指してくれるよう，我々の分野の魅力を訴えてゆく方法を模索していきたい．また，大型研究計画の策定についても，学術会議での取りまとめ過程において，気象学界の意向を反映させるべく，引き続き取り組んでゆく所存である．

一方，上記(2)に関連する話題として，2011年7月のIUGG総会時(メルボルン)に行われたIAMAS執行委員会(EC:Executive Committee)の役員改選についてご報告する．IAMAS議長には中国のG. Wu

氏(ICDM(後注2))に替わり，フランスのA. Cous-tenis氏(ICPAE:International Commission on Planetary Atmosphere and their Evolution)が女性として初めて選ばれた．副議長(vice president)も改選され，米国のJ. Penner氏(ICACGP)と英国のJ. Turner氏(ICPM)が選出された．幹事(secretary)にはドイツのH. Volkert氏(ICDM)が留任したが，全体委員(member at large)5名のうち2名が改選され，新たに中国のD. Lu氏(IRC)とイスラエルのC. Price(ICAE:International Commission on Atmospheric Electricity)氏が加わった．名古屋大学の安成哲三氏とアルゼンチンのE. Berbery氏，ロシアのV. Kattsov氏の3名は留任した．

IAMAS小委員会メンバーの交替に伴い，ECの日本代表委員を中島前委員長から新委員長の中村が引き継ぐこととなった．IAMAS小委員会は，引き続きIAMAS・IUGGと気象学会とのパイプ役としての機能を果たす所存である．既に，学会電子情報委員会に依頼し，気象学会のホームページからIAMASとIUGGのニュースレターが閲覧できるよう取り計らって頂いた．特に，若手研究者にとっては，海外での研究発表の機会や留学の機会を得るための有益な情報源となることを願っている．

なお，今回のIAMAS総会(DACA-13, <http://www.daca-13.org/> (2012.5.21閲覧))は，IACSとの共催で，2013年7月8～13日の6日間，ダボス(スイス)で開催されることが決まっている．1人でも多くの会員の皆さんに参加して頂けることを願っている．

後注

(後注1) 2012年度春季大会でも，規模はやや縮小されたものの，リクルートブースが開設された．

(後注2) IAMAS傘下の国際委員会のうち，学術会議IAMAS小委員会委員が深く関係する委員会の呼称については，第1表の説明を参照のこと．その他の委員会については，本文中に呼称を記載した．

参考文献

- 中島映至，中村 尚，2007：日本学術会議の改組とIAMAS小委員会の設立．*天気*，54，817-818．
 中村 尚，遊馬芳雄，寺尾 徹，中島映至，2009：日本気象学会・日本学術会議IAMAS小委員会共同実施「若手研究者アンケート」第1次集計結果の分析．*天気*，56，575-585．